

# 法然と明遍の念仏

伊藤 茂樹

## はじめに

中世浄土教において、念仏聖を率いて一つの集団をなした祖師として、明遍と法然がいる。両者の活動期は、重源の東大寺復興勸進の時点であり、周辺に多くの念仏聖が存在して一つの集団を形成している。明遍の念仏信仰を語る際には、法然との交流が強調され、関連する念仏法語も確認される。法然の専修念仏集団と高野聖の存在は、中世の浄土教伝播の一翼を担う存在であるが、その頭目とされる両者の念仏には、法然が明遍に影響をあたえた側面と相反する思想的な意義が確認される。<sup>(1)</sup> 本稿では、両者の念仏思想の本質を探り、その特質を探ってみたい。

## 一 明遍の立場

明遍と法然の関係は、諸種の法然伝から相互の関係を見ることが出来るが、法然の念仏義をもって、浄土教に帰入した

かは不明である。確かに『散心問答』における両者の法語にみえるように、明遍の浄土教において法然の影響は少なくないであろう。しかし、『法然上人行状画図』からみえる、明遍が法然を信奉する姿には、いくらかの双方の念仏信仰の隔たりを示唆する興味深い記述がみえている。

僧都ひとへに上人の勸化を仰信し、ふた心なかりければ、上人の滅後にはかの遺骨を一期のあひだ頸にかけて、のちには高野の大將法印貞鎌倉右衛門下息相伝せられけり。籠山三十年のあひだ、朝には自誓戒、舍利講、夕には臨終の行儀を修し、惣じて六時の同音念仏、日々夜々にをこたる事なし。他のためには、人の、ぞみにしたがひて、頭密の法門を談ぜられけれども、自行には一向称名のほか他事をまじへず。長齋持戒にして、草庵をいづることなし。練行としふりて、薫修日あらたなり。

〔法伝全〕七九頁

明遍は、法然を讃仰し滅後にはその遺骨を首にかけ、自行としては朝に自誓戒と舍利講、夜は臨終行儀、また六時にわたって同音念仏することを欠かしたことがないという。ここ

からは、戒律護持、舍利信仰という信仰の一端が伺え、法然の専修念仏ではなく、南都浄土教の立場にあることを注意したい。また、自行には一向称名以外の他事をまじえないとしても、望まれば顕密の法門を談ずるといふ。「蓮華谷」云成<sup>ニ</sup>専修ノ行者、後不<sup>レ</sup>修<sup>ニ</sup>余行<sup>一</sup>但<sup>シ</sup>当山三密ノ地<sup>カ</sup>故<sup>ニ</sup>思<sup>テ</sup>地<sup>ノ</sup>為<sup>メ</sup>ト公事<sup>一</sup>弥陀ノ供養法一座勤<sup>レ</sup>之<sup>」</sup>（『浄全』一一巻、八九頁）として、専修の行者と成りながらも密教の弥陀供養法を修したという明遍の立場は、専修としつつも、なおも顕密の行法を否定することのない立場を垣間見ることが出来るであろう。

先に示したように、明遍は舍利信仰や戒律護持という、南都・高野山系の浄土聖の流れを汲んでいる。法然伝の大原問答は、明遍の立場は一樣に「光明山寺明遍」と記され、一心寺所蔵の『一行一筆阿弥陀経』<sup>(2)</sup>においても、光明山寺聖の冒頭に明遍の名が記されている。また濱田隆氏は、明遍関与の遺品とされる蓮華三昧院蔵の阿弥陀如来像図は南都の智光曼荼羅を系譜を引くものであるとし、観察念仏の礼拜対象と指摘された<sup>(3)</sup>。明遍の念仏信仰は、法然の薫陶を受けつつも、その本質には南都浄土教の流れを逸脱するものではない。では次に、両者の念仏における具体的な相違点を示したいと思う。

## 二 法然と明遍の念仏

### (一) 観察念仏

先の「散心念仏」という法語は、末代悪世の衆生が、どのように生死を離れることが出来るのかという明遍の問いに對して、法然は「南無阿弥陀仏と申して極楽を期するばかりこそし得つべき事を存じてそうらへ」として称名念仏の道を示した。しかし明遍は「念仏は申しそうらえども心の散るをばいかがしそうらうべき」として逆に質問した。すると法然は、「散れども名を称すれば仏願力に乗じて往生すべしとこそ心得てそうらへ」として、心が散り乱れたままでの念仏を唱えることをすすめ、明遍もそれに納得したという。<sup>(4)</sup>ここに、共通の念仏観を有していることがみえる。しかし、良忠の『伝通記』には、

蓮華谷ノ云立<sup>ル</sup>ハ三昧ノ名<sup>一</sup>約<sup>ニ</sup>其ノ本意<sup>ニ</sup>法華三昧理趣三昧等皆以如<sup>シ</sup>此念仏ノ一行通<sup>ニ</sup>於定散<sup>一</sup>於<sup>レ</sup>中定心以<sup>テ</sup>最勝<sup>ナル</sup>故且<sup>ク</sup>從<sup>テ</sup>本意<sup>ニ</sup>通<sup>シ</sup>立<sup>ト</sup>念仏三昧<sup>ノ</sup>之名<sup>一</sup>（『浄全』一一巻、一五六頁）

として、定心を最勝の念仏としている。また長西録には明遍の著作として、『往生論五念門略作法』一卷、『往生論臨終五念門行儀』一卷、『往生論五念門略論』一卷、が存在したことが記されているが（『日仏全』一卷、三四四頁）、これらは五念門

についての書物である。『往生要集』以降の浄土教が、観察重視の五念門にその比重があることからしても、明遍が観察を第一義として重視していた姿勢が窺われるであろう。しかし、法然は観想念仏について、

近來の行人觀法をなす事なけれ。仏像を觀ずとも、運慶康慶がつくりたる仏ほどだにも、觀じあらはすべからず。極樂の莊嚴を觀ずとも、桜梅桃李の華葉ほども、觀じあらはさん事かたかるべし。

（『法然上人行狀繪圖』二二卷、『法伝全』一一四頁）

として、觀察念仏については一貫して否定した立場をとっている。一方で、明遍は心を散らしつつ念仏する機根を、

鎮西ノ本光房奉レテ問ニ明遍ニ云ク心若シ散漫セハ其ノ時ノ称名ハ非レハ善ニ閑メテ心ヲ後ニ可シト唱フ也申シ候ハ如何カ可ク用意ス候覽明遍答テ云ク其レハ上機ニテゾ候覽如ニ空阿弥陀仏一下機ハ心ヲ静ムル事ハ何難レハ叶ヒ念珠ノ緒ツヨクシテ不レ論セ乱レ不レ乱ラクリ居コソ候エ心ヲ静シ時ト思フハ堅固ニ念仏申サン者ニテゾ候ハンスラン

（『決答授手印疑問鈔』下、『浄全』一〇卷、四九頁）

心をしずめ、念仏を唱えることが出来るのを上機として、それが出来ぬ散心念仏の機根を下根下機として、觀察念仏に適わぬ機根が称名念仏を唱えるという『往生拾因』にみられた念仏觀を継承している。『往生拾因』は、院政期浄土教の理論を担う上で非常に重要な書物であるが、法然の曾孫弟子にあたる道光の『往生拾因私記』には、「伝聞黒谷不レ用ニ此書ニ」

（『浄全』一五卷、三九六頁）として、法然が『往生拾因』には全く関心を示さなかつた事が記されている。<sup>(5)</sup>両者の念仏の一つの隔たりを感じさせるものであろう。

## （二）本願論

善導・法然流の浄土教の本願とされるのは、『無量寿経』第十八願文にある。本願とは、阿弥陀仏が菩薩である時代に立てた誓願の別願であり、善導の解釈により、十念の念を称とし、称我名号として南無阿弥陀仏と唱える事こそが往生の生因とする。すなわちその主旨は、「然レバ則弥陀如来法蔵比丘之昔シ被レ催ニ平等ノ慈悲ニ普為レ撰ニ於一切ヲ不以下ニ造像起塔等ノ諸行ヲ為中」往生ノ本願上唯以ニ称名念仏ノ一行ヲ為ニ其本願ト也」（『選択集』、『昭法全』三二〇頁）として、称名念仏の一行、すなわち誓願の十八願をもつて本願となすのである。一方で明遍の本願論、ことに三願についての解釈は少し異なっている。

又或人、問ニ明遍僧都ニ云、十九、二十の願の正しき其の体いかんと、答云、十九は来迎、二十は過遂の願也、十八、十九、二十の三種の願、俱に一人の上に具すべき也。おほよそ、十八の生因左右にあたはずと雖も、十九の願ことに大切也、正しく往生の機に相應することは、いかにも仏身を拝見せん時、円満すべき也、然れば思を宝所にかけて、是を称念するに、十九は即来迎にあづかるなり。二十の願また以て殊勝也、我等がふかく頼む所、只この願也。ゆへいかんとなれば、此願の意は、いかにも往生を心にかけて、弥陀に

帰しつるものは、あさきも深きも、順次多生に、皆其ののぞみを成ずるなり、おほよそ、三種の願、利益いづれもく、おろかならず、皆以殊勝也

(『広義瑞決集』三師講説発刊所、一九一四年、九頁)

浄土教者において、十九、二十の願は、来迎願(十九願)、過遂願(二十願)として重視されるが、明遍は十八、十九願、二十願ともに一人のうちに具わるといふ。十九願については極楽の宝所に心をかけつつ称名念仏を修して来迎にあずかるとし、二十願については順次で往生を遂げなければ多生にその望みを遂げるとする。すなわち三生過遂願である。明遍の三願論は、前代の浄土教者の三願論を基本的に継承しているといえるが、興味深いのは、良忠の『東宗要』に、「縦<sup>ニ</sup>雖<sup>レ</sup>非<sup>ニ</sup>順次<sup>ニ</sup>多生<sup>ノ</sup>往生<sup>モ</sup>亦非<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>期<sup>セ</sup>所詮<sup>ハ</sup>深<sup>ク</sup>憑<sup>ニ</sup>第二<sup>ノ</sup>願<sup>ヲ</sup>」(『浄全』一巻、七七頁)とみえるように、二十願を重視することである。大西磨希子氏は、明遍遺品とされる蓮華三昧院の阿弥陀三尊像は、二十願に基づいて浄土に往生した際に目にする光景をあらわしたものであると指摘されたが、そもそも二十願の願意は「聞<sup>テ</sup>我名<sup>ヲ</sup>一<sup>ニ</sup>係<sup>ニ</sup>念<sup>ヲ</sup>我<sup>カ</sup>国<sup>ニ</sup>植<sup>エ</sup>諸<sup>ノ</sup>徳本<sup>ヲ</sup>」(『浄全』一巻、八頁)として、我が国に想いを懸け、観察念仏、様々な徳本を植える、諸行往生を意味する。珍海は『決定往生集』において、「順<sup>ニ</sup>本願<sup>ニ</sup>者四十八願<sup>ノ</sup>中云聞我名号係念我国云云今云称名<sup>ハ</sup>実<sup>ニ</sup>是<sup>レ</sup>正中<sup>ノ</sup>之正也」(『決定往生集』、『浄

法然と明遍の念仏(伊藤)

全』一五巻、四九〇頁)と本願は第二十願に基づくことを主張するように、南都浄土教は観察念仏・諸行往生を軸とする念仏である。明遍念仏の基本的な姿勢は、二十願重視にあり、観察の重視、諸行往生に比重がある。ここには、法然が

ねんぶつのほかの一切の行は、これ弥陀の本願にあらざるがゆへに、たとひ目出たき行なりといへども、念仏にはをよばざるなり。

(『法伝全』一五三頁)

と、十八願を王本願として、称名念仏を唯一の往生行の正因とした「選択本願」説とは、明白な隔たりが認められるのである。

### 三 重源をめぐる法然・明遍

最後に、法然・明遍をめぐる両者の立場をみたいと思う。法然・明遍の活動期は、時期的に重源が東大寺復興期(一一八一—一二〇三)に該当している。重源は全国において七つの別所を作り、ここを拠点として不断高声念仏を行っていた。別所においては、湯屋をおいて施浴を施し、労働者の慰労や近隣住民の結縁を結んだ。また三角五輪塔を設置し、ここに舍利を奉納し、丈六の阿弥陀如来坐像を安置した。重源の念仏は、舍利信仰や施浴行という聖道門的な色彩の強い念仏観に立脚しているが、これらは、明遍の念仏観に極めて合致したものである。重源の不断念仏は、地域住民の結縁を促す大念仏(融

## 法然と明遍の念仏(伊藤)

通念仏)であるが、明遍は『九卷伝』(『法伝全』三七八頁)に木を持って念珠を振り回すという、従来の百万遍念仏の易行化を促進した「ふりふり百万遍」を考案したという。また先に見たように、明遍は舍利信仰も抱いている。重源の別所における念仏は明遍の念仏と変わることはない。空阿弥陀仏という阿弥陀仏号の保持は、重源の阿弥陀仏号であり、明遍の念仏は、重源の勧進活動にリンクしたものであったといえよう。

一方で、法然は大仏殿再建途上の東大寺で、重源の依頼を受け浄土三部経を講説したが、現存する講義録である『三部経釈』には、「今或上人、天王寺等処処謗此念仏三昧云々」(『阿弥陀経釈』『昭法全』一四四頁)というように、辛辣な批判があったことがみえている。ここには、双方の念仏観の相違が浮き彫りにされている。法然と明遍の念仏観は、根本的な相違があるといわざるをえないのである。

## まとめ

法然・明遍の念仏については、五つの相違が認められる。それは明遍からみれば、①観察念仏重視、②諸行往生の肯定、③数量念仏の奨励、④祈禱念仏、⑤二十願を軸とした本願論、という五点にある。ほかにも相違点は存在するであろうが、ここには鮮やかな対比がみえている。明遍の念仏観が南都浄土教の系譜を継承するのに対して、法然の「選択」思

想は、革新的な側面を抱いていたことは疑いない。その一方で、双方の念仏観に共通するのは、心乱れた状態で声を出し念仏するという「散心念仏」、すなわち罪悪生死の凡夫が念仏を唱えれば往生するという善導の「本願念仏」である。両者の念仏観は、善導念仏の受容という側面では、共有した念仏がみえているのである。法然・明遍の念仏は、その本質を見失ってはいけないのである。

1 明遍が法然と影響を受けたとする考察は、大谷一九六一、那須二〇〇七、西村二〇一三。大谷氏は、明遍は法然との出会い以後、それまでの顕密諸行を捨てて法然流念仏に帰入したことを強調される。以降の論考は、基本的に大谷説を継承している。なお名畑一九二〇、關一九九四は法然・明遍には相違があることを強調している。

- 2 田中一九七四。
- 3 濱田一九六五。
- 4 『昭法全』六九二頁。
- 5 拙稿二〇一一。
- 6 大西二〇〇七。
- 7 石田一九五九。

## 〈参考文献〉

- 名畑應順「明遍僧都の研究」(『仏教研究』第一卷第三号、一九二〇年、五二六―五六二頁)
- 石田尚豊「重源と法然」(『日本仏教』第四号、一九五九年、三〇―)

三八頁)

大谷旭雄「散心問答と明遍」(『法然浄土教とその周辺』乾、山喜房  
仏書林、二〇〇七年、二五九―二七三頁、初出一九六一年)

濱田隆「蓮華三昧院伝来阿弥陀三尊像と明遍をめぐる浄土教」(『仏  
教芸術』五七号、一九六五年、八九―一〇一頁)

田中塊堂「一行一筆勸進心経・阿弥陀経に就いて」(『日本文化と浄  
土教論攷』井川博士喜寿記念会出版部、一九七四年、四一七―  
四三〇頁)

青木淳「空阿弥陀仏明遍の研究Ⅲ——中世高野山における結衆とそ  
の背景——」(『印度学仏教学研究』第四二卷第二号、一九九四  
年、六七七―六七九頁)

關恒明「明遍についての一考察」(『大正大学大学院研究論集』第  
一八号、一九九四年、一一三―一二八頁)

大西磨希子「蓮華三昧院阿弥陀三尊像の研究——主題の検討を中心  
に——」(『西方浄土変の研究』第二部第一章、中央公論美術出  
版、二〇〇七年、二〇五―二四二頁、初出一九九七年)

那須一雄「蓮華谷明遍の浄土教思想」(『印度学仏教学研究』第五六  
巻第一号、二〇〇七年、二八―三四頁)

伊藤茂樹「法然と東大寺勸進——数量念仏を中心として——」  
(『八百年遠忌記念法然上人研究論文集』知恩院浄土宗学研究所、  
二〇一一年、一九三―二二八頁)

西村慶哉「明遍教学の研究」(『龍谷大学大学院文学研究科紀要』第  
三五集、二〇一三年、一二八―一四一頁)

〈キーワード〉 法然、明遍、重源、本願、觀察念仏

(知恩院浄土宗学研究所研究員)

法然と明遍の念仏(伊藤)

新刊紹介

袁輪 顕量 著

### 日本仏教史

四六版・二七四頁・本体価格二、四〇〇円

春秋社・二〇一五年六月